

情報圏倫理の基礎と実装について

氏名 細川雄一郎(首都大学東京)

近年の情報の哲学と情報倫理の前衛的推進者として、L. フロリーディがいる。彼は、現代の情報社会において、対象がその中で意味づけられ、評価される文脈となるべき最も適切な抽象度をもつ、と彼が想定する環境概念のことを、「情報圏 (infosphere)」と呼んだ。この情報圏では、簡単に言えば、(α)何らかの情報を担い、(β)周囲の何らかの情報を担う対象に、何らかの意味で影響を与えうるものであれば、何であれそれは単なる「道具的価値」を超えた、「道徳的価値」の担い手となる資格をもっている。従って、そこで自体的・内的に「道徳的価値」を付与されるのは、人間だけでなく、動物や生命だけでなく、コンピューターやそこに内蔵されたプログラム自体、そしてそれらを典型とする人工物(その現代的な代表例は人工知能やロボットだろう)、さらには原理的に(α)(β)を満たす自然物にまで拡張される。このような、情報圏の内部でそれ自体として尊重 (respect) に値する最低限の内的価値 (minimal intrinsic value) をもつ対象のことを、彼は情報対象 (information object) と呼ぶ。現在「情報倫理」の名で呼ばれる言説は多岐にわたるため、ここでは上のようなフロリーディの情報倫理のことを、特に「情報圏倫理 (ethics in infosphere)」と呼んでおくことにしよう。

このように紹介すると、彼の情報圏倫理は、真面目な人文学の世界像とは到底思われず、もしかすると生理的な拒絶反応まで引き起こすものかもしれない。しかし、彼の一連の仕事、たとえば [1] や [2] を見れば、それが彼の広大な哲学史と情報科学に関する知見に基づいて綿密に企てられた、野心的で壮大な純人文学的プロジェクトであることが判るだろう。それは、コンピューター専門職の現場、現実のインターネット社会で自然発生的に増殖し続ける多種多様なコンプライアンスだけでなく、例えばアリストテレスからカント、ミルといった多くの古典的な倫理学説を、いわば「情報対象の価値論 (axiology of information object)」として、統一的な観点の下で分類・整理・比較し、秩序づけ、再分析・再評価することを射程に置いている。実際、彼の仕事を先入観なしに読めば、その企てがかなりの程度成功している、あるいは成功しうることに、おそらく一定の説得力を感じるだろう。

その議論の理論的な部分をいまここで紹介する余裕はないが、その代わりに、情報圏倫理のアクチュアリティをより感じさせる、フロリーディ自身が言及しているその比較的慎ましい直観的事例を挙げておくと、UNESCO の現実的活動がある。それは、言うまでもなく有形・無形の文化遺産をシリアスな保護の対象としている。それらはほとんどの場合、生命を有するカテゴリーのものでさえないはずなのに、単なる道具的な価値以上のものを我々の多くがそこに感じ、UNESCO の活動に我々の多くが、ほとんど本能的にと言ってよいほど、当然のように賛同しているように思われる。

また、彼は情報対象の価値論の必要性を説く中で、生まれつき脳をもたず生まれてきた Mary という仮想の女性を例に考えている。ここには、現代の人文学が避けて通れない最も切実なテーマが象徴されているだろう。それは例えば、不可逆な脳死状態にある人々、そして彼らから移植された臓器たちの、「実存」の問題のことである。フロリーディの根底にある問いは、彼らの「実存」が、もはや従来の倫理的価値判断の枠組み——それが理性的人間中心主義を超えた、生命中心主義の内部でも、生態系中心主義の内部であっても——では、決して十分に説明し尽くすことはできない、という倫理的直観にあると思われる。その意味で、彼の情報圏倫理の真のアクチュアリティ、真の切実な射程は、実の所この「実存的価値」の再構成、ということにある、という可能性もまた、我々は

彼の学説を評価する上で視野に入れておくべきであろう(逆にいうと、そうでないとするれば、彼の学説の興味は、そうである場合よりもずっと差し引かれることになるだろう、ということである)。

以上のような情報圏倫理の展望と動機付けの下で、今回発表者が行うのは、しかし、残念ながら聴講者の期待を大きく裏切ることになるかもしれない、一見地味な作業になろうと思われる。それは、一言でいえば、情報圏倫理の基礎と実装を与える作業である。というのも、フロリーディをして、理性的存在者のみを成員とするカント的「目的の王国」から、生命を有するもののみを成員とする「生命圏 (biosphere)」をも超えて、「情報圏 (infosphere)」へと環境概念を大きく拡張させたのは、対象の評価は、それを取り巻く環境のモデルと、そのモデルを記述する言語に相対的である、という、今日ではほとんど自明な哲学的・論理的原理であるだろう。しかし、そのモデルや言語に関して、フロリーディが現状用意している道具立ては、未だ素朴にすぎる部分、抽象的すぎる部分が多く残されているように思われる。一方、現在、(1)理論計算機科学の側には、R. ミルナーに始まる情報プロセスのモデルと言語の発展があり、(2)情報理論の側には、ドレツキに端を発するパーワイズとセリグマンらの情報フローのモデルと言語の発展、がある。本発表では、これらが実際の情報圏のモデリングと記述にどのように寄与するか、それを通じて、その中で情報対象の評価がどのように影響されるか、その倫理的含意を考えてみたい。

参考文献

- [1] Floridi, L. 1999. Information ethics: on the philosophical foundations of computer ethics. *Ethics and Information Technology* 1, 1, 37-56.
- [2] Floridi, L. 2002. On the intrinsic value of information objects and the infosphere. *Ethics and Information Technology* 4, 4, 287-304.